長崎大学教育学部紀要－教育科学－　第57号　91～106（1999年6月）

幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学的研究Ⅱ

進　野　智　子[*1]　　小　林　小夜子[*1,2]

A Study of the Transition from a Kindergarten to a Primary School Ⅱ

Tomoko SHINNO[*1]　　Sayoko KOBAYASHI[*1,2]

目　的

幼稚園から小学校への移行に関する研究においては，移行する主体が幼児・児童でありながら，その研究は従来子供の親を介して得られた資料に基づいていた（飯島，1990）。さらに，移行に関する研究において教師を研究対象とすることの必要性が主張されている（飯島 1998，千羽，1994）にもかかわらず，教師を主対象とした研究は非常に稀である。

我々は，子供が幼稚園から小学校へ移行する際に，それぞれの教育機関における教師が，幼児・児童をどのように把握するかによって，新しい教育機関への移行が円滑に行ったり不適応になったりすると考え，両教育機関における教師の幼児・児童の捉え方が，子供に反映しているのではないか，さらに，この教師間の幼児・児童の捉え方の差異が児童の小学校への不適応につながっていくのではないかという仮説を立てた。幼稚園及び小学校教師に対して，同一の質問紙「教師による幼児の行動評定尺度」（柏木，1998）により，幼稚園教師９名小学校教師11名を対象に幼稚園から小学校への移行に関する意識調査を行った（進野・小林，1999）。その結果，以下のことが明らかにされた。両教育機関の教師間には，幼稚園教育における重要性に関して必ずしも一致が見られなかった。即ち，幼稚園教師は遊び中心および個の重視を幼稚園教育に求めているのに対して，小学校教師は基本的生活習慣のしつけおよび協調性を幼稚園教育において重要であると見なしていた。また，幼稚園教師は，担任クラスの年長児を自己抑制と自己主張・実現が可能であると捉えているのに対して，小学校教師は，小学１年生を自己抑制と自己主張・実現が困難であると捉えていた。

先の研究（進野・小林，1999）における教師は，幼稚園あるいは小学校だけのどちらか一方の教育経験しか持たない教師であった。しかしながら，幼稚園・小学校の双方における教育経験を持つ教師がどちらか一方における教育経験しか持たない教師と比較してどのような特徴を持っているのかを明確にすることが手続き上必要であると考える。いわゆる「幼小連携」の必要性がいわれている今日，幼稚園と小学校の双方の教育経験を持つ教師がどのような意識を持っているのかを明らかにすることの意義は大きい。そこで，本研究においては，幼稚園と小学校双方の教育経験を有する教師が，幼稚園から小学校への移行に関してどのような意識を持っているかについて明らかにしていくことを目的とする。

＊1　筆者たちは，多忙な中を本アンケートにご協力下さいました先生方に深謝いたします。また，筆者たちは，アンケート結果の整理に当たり協力下さいました幼児心理ゼミナール4年生の田中さおりさん，野口愛子さん，張本久美さん，藤崎恵さん，和田陽子さんに感謝します。
＊2　玉木女子短期大学

方　法

質問紙；幼稚園と小学校の両教育機関における教育経験を有する教師に，質問紙により回答を求めた。質問紙はフェースシート・経験別質問および共通質問から成る。質問紙の細部は，別紙資料に示す通りである。回答者は，①幼稚園年長組の担任経験および②小学校１年生の担任経験の有無によってＡ～Ｄラインに分類された。Ａラインは，①および②の教育経験を有することを意味する。Ａラインはさらに幼稚園の担任経験が小学１年生の担任経験に先行するか否かによってＡ－１ライン（幼稚園年長児担任経験後に小学１年生の担任）とＡ－２ライン（幼稚園年長児の担任経験前に小学１年生の担任経験有り）とに分類された。Ｂラインは，幼稚園年長児担任の経験はあるが，小学１年生の担任経験はない。Ｃラインは，幼稚園年長児担任の経験は無いが小学１年生の担任経験はある。Ｄラインは，幼稚園年長児担任および小学１年生の担任経験も無い。各ラインの質問は幼稚園教師経験が小学校においてどのように活用されるかについて，『子供の生活面』『子供の学習面』『保護者との関わり』『同僚へのアドバイス』『その他』の項目に分けられ，自由記述による回答が求められた。

調査対象；長崎市内および長崎県西彼杵郡内の公立小学校および国・公立幼稚園に勤務する幼稚園と小学校の両教育機関における教育経験を有する教師35名に対して，質問紙が平成10年10月に郵送によって配布され，平成10年11月に郵送により回収された。35名の中，１名分が転送先不明で返送されてきた。回答者は，31名であったので，有効回答率は，91.2%であった。回答者の31名の中には男性教師２名を含む。表１は，各ラインに所属する回答者の平均年齢，平均在職年数を示す。

表１　調査対象者の平均年齢・平均在職年数

ライン	対象者数（Ｎ）	平均年齢	年齢範囲	年齢の標準偏差（ＳＤ）	平均在職年数	在職年数範囲	在職年数の標準偏差（ＳＤ）
Ａ	20	37.8	29～54	6.1	14.3	6.5～31.5	5.9
（Ａ－１）	13	38.8	32～54	6.6	14.9	8.5～31.5	6.5
（Ａ－２）	7	35.9	29～41	4.5	13.1	6.5～19.5	4.2
Ｂ	2	41.0	39～43	2.0	18.5	16.5～20.5	2.0
Ｃ	6	47.8	40～58	7.0	21.8	7.5～33.5	9.0
Ｄ	3	40.0	28～52	12.0	18.3	6.5～30.0	1.3
全対象者	31	40.2	28～58	7.6	16.3	6.5～33.5	7.4

結果と考察

本質問紙による回答は自由記述式によってなされたものである。結果の整理に当たっては，回答内容をいくつかの項目に分析する手続きがとれた。表２－ａは，ライン別の質問に関する回答者自身の言葉による記述内容を分類した項目を示す。表２－ｂは共通質問に

対する回答内容を示す表２－ａにおいて，「移行」とは幼稚園から小学校への移行，「個人差」とは一人ひとりの個性や発達の違い，「子供の実態把握」とは子供の全般的な実態の把握，「子供への援助の仕方」とは子供への接し方をそれぞれ意味する。また，共通質問２の回答内容に関しては，回答者が少なかったため省略した。

表２－ａ　経験別質問に対する回答内容

子どもの生活面	子どもの学習面	同僚へのアドバイス
イ…発達段階 ロ…移行 ハ…基本的生活習慣 ニ…自主性・自発性 ホ…社会性 ヘ…個人差 ト…幼小連携 チ…子どもの実態把握 リ…子どもへの援助の仕方 ヌ…遊びの捉え方 ル…道徳 ヲ…集団生活	あ…発達段階 い…個別指導 う…学習（文字・数） え…移行 お…幼小連携 か…自主性・自発性 **保護者との関わり** A…保護者に対する理解 B…保護者への対応 C…保護者との信頼関係	a…子どもとの関わり方 b…過小評価しない c…生活科の指導 d…幼小連携 e…移行 f…学習への取り組み g…発達段階 h…遊びの効用

そ　の　他
・幼小間の教育の違い ・保護者の担任（幼稚園経験のみで小学校経験のない担任）に対する不安と理解 ・年少児の保育について ・幼稚園経験を生かした指導の工夫 ・教師自身の小学校における実態把握の甘さ ・小学校１年生の遊び・体験の重視 ・小学校における児童に対する幼稚な評価 ・小学校１年生の実態把握の必要性 ・幼稚園教育の多様性 ・幼稚園における仕事の進め方 ・幼小連携 ・幼稚園における教育活動 ・幼稚園経験者のカウンセリング・マインド

表２－ｂ　共通質問に対する回答内容

共通質問1	イ…自発的な遊びへの取り組み ロ…遊びへの集中力 ハ…汚い遊び ニ…遊びの持続性 ホ…遊びの創造性 ヘ…けんかの処理能力 ト…身体的なけんか チ…自発的な学習への取り組み リ…想像力 ヌ…人と関わる力 ル…環境への適応能力 ヲ…知識	ワ…経験 カ…けじめ ヨ…意欲・関心・態度 タ…表現力 レ…耐性 ソ…集団生活への適応能力 ツ…社会性 ネ…自主性・自発性 ナ…自己中心性 ラ…体力 ム…偏食
共通質問3	あ…幼稚園・小学校の教職経験の必要性 い…幼小連携の必要性 う…幼稚園・小学校の子どもの実態の把握 え…発達段階に応じた指導の必要性 お…小学校教員の合科的活動や総合学習における指導力の不足 か…幼稚園教員の子どもの遊びや活動における総合分析力の不足 き…子どもに寄り添う教育の必要性 く…教育職に対する意識の低さ	
共通質問4	A…子どもに対する保護者の価値観の影響 B…各幼稚園における保育形態・保育内容の違い C…幼稚園教育の重要性 D…一人ひとりを把握することの難しさと重要性 E…環境設定の重要性 F…教員数の不足 G…移行を配慮した保育の必要性 H…基本的生活習慣の指導の徹底 I…保育環境の乏しさによる子どもの活動の制限 J…家庭・地域・学校の連携の重要性 K…自由保育のはきちがえ（自由保育と放任の違い） L…教師の役割の再考 M…心情・意欲・態度の育成の重要性 N…自由保育による自主性・自発性の育成 O…自由保育による子どもの経験の偏り P…幼稚園教育の見直し Q…自由保育による経験の豊富さ	

共通質問5	a…小学校教育のゆとりのなさ b…幼稚園教育と小学校教育の隔たり c…教師の資質及び意識の向上 d…学級数及び学級定員の見直し e…移行を配慮した教育の必要性 f…子どもに寄り添う教育の必要性 g…幼小連携の必要性 h…家庭・地域・学校の連携の重要性 i…幼稚園教育の重要性 j…幼稚園・小学校間の連携の必要性 k…カリキュラムの見直し l…個々の児童理解の必要性

表２－ａおよび表２－ｂから，回答者の回答内容が示唆される。

(1)　幼稚園年長児担任後に小学１年生を担任することへの影響

子供の発達に沿えば，言うまでもないが，幼稚園年長児の後に小学１年生を経験する。このように，子供の発達に沿って幼児・児童の担任をする教師と子供の発達と逆向して小学１年生の後に幼稚園年長児を経験する教師との間には，幼稚園から小学校への移行に関する認識にいかなる差異が見られるかについて明らかにするために，対象者を，幼稚園年長児・小学１年生の経験順によってA-1（幼稚園年長児担任の後に小学１年生を担任）とA-2（小学１年生の担任後に幼稚園年長児を担任）を分類して検討する。

表３－ａは，Ａラインにおけるａ－１，Ａ－２の経験別質問に対する平均回答数を示す。

表３－ａ　Ａラインにおける経験別質問に対する平均回答

項目	ライン	Ａ－１	Ａ－２	計
子どもの生活面	イ	0.923	0.143	0.650
	ロ	0.615	0.286	0.500
	ハ	0.692	0.429	0.600
	ニ	0.462	0.000	0.300
	ホ	0.231	0.000	0.150
	ヘ	0.000	0.000	0.000
	ト	0.000	0.143	0.050
	チ	0.000	0.286	0.100
	リ	0.000	0.571	0.200
	ヌ	0.000	0.143	0.050
	ル	0.000	0.000	0.000
	ヲ	0.000	0.000	0.000
子どもの学習面	あ	0.154	0.286	0.200
	い	1.000	1.143	1.050
	う	0.615	0.143	0.450
	え	0.077	0.000	0.050
	お	0.000	0.143	0.050
	か	0.000	0.000	0.000

保護者者との関わり	A	0.308	0.571	0.500
	B	0.615	0.714	0.650
	C	0.308	0.143	0.050
同僚へのアドバイス	a	0.538	0.429	0.400
	b	0.231	0.000	0.150
	c	0.077	0.000	0.050
	d	0.231	0.000	0.150
	e	0.000	0.571	0.200
	f	0.000	0.000	0.000
	g	0.000	0.286	0.100
	h	0.000	0.000	0.000

表3－bは，AラインにおけるA－1，A－2の共通質問に対する回答における項目別平均回答数である。

表3－b　Aラインにおける共通質問に対する平均回答数

項目	ライン	A－1	A－2	A
共通質問1	イ	0.231	0.000	0.150
	ロ	0.462	0.000	0.300
	ハ	0.077	0.000	0.050
	ニ	0.154	0.000	0.100
	ホ	0.077	0.000	0.050
	ヘ	0.077	0.000	0.050
	ト	0.077	0.000	0.050
	チ	0.077	0.000	0.050
	リ	0.000	0.000	0.000
	ヌ	0.077	0.000	0.050
	ル	0.077	0.000	0.050
	ヲ	0.077	0.000	0.050
	ワ	0.077	0.000	0.050
	カ	0.077	0.000	0.050
	ヨ	0.462	0.143	0.350
	タ	0.231	0.000	0.150
	レ	0.154	0.000	0.100
	ソ	0.077	0.000	0.050
	ツ	0.000	0.143	0.050
	ネ	0.000	0.143	0.050
	ナ	0.000	0.000	0.000
	ラ	0.000	0.000	0.000
	ム	0.000	0.000	0.000
共通質問3	あ	0.385	0.429	0.400
	い	0.615	0.857	0.700
	う	0.077	0.286	0.150
	え	0.385	0.286	0.350
	お	0.077	0.000	0.050
	か	0.077	0.000	0.050
	き	0.000	0.143	0.050
	く	0.000	0.000	0.000

共通質問4	A	0.077	0.000	0.050
	B	0.154	0.000	0.100
	C	0.077	0.143	0.100
	D	0.154	0.143	0.150
	E	0.077	0.143	0.100
	F	0.154	0.000	0.100
	G	0.077	0.000	0.050
	H	0.154	0.000	0.100
	I	0.077	0.000	0.050
	J	0.077	0.000	0.050
	K	0.077	0.143	0.100
	L	0.077	0.143	0.100
	M	0.154	0.286	0.200
	N	0.000	0.143	0.050
	O	0.000	0.143	0.050
	P	0.000	0.000	0.000
	Q	0.000	0.000	0.000
共通質問5	a	0.154	0.286	0.200
	b	0.077	0.000	0.050
	c	0.154	0.000	0.100
	d	0.154	0.143	0.150
	e	0.077	0.286	0.150
	f	0.154	0.286	0.200
	g	0.077	0.000	0.050
	h	0.000	0.143	0.050
	i	0.000	0.000	0.000
	j	0.000	0.143	0.050
	k	0.308	0.000	0.200
	l	0.000	0.000	0.000

表4は，A－1ラインとA－2ラインにおける経験別および共通質問項目に対する回答の分散分析の結果を示す。

表4から，経験別質問項目（子どもの生活面・子どもの学習面・保護者との関わり・同僚へのアドバイス）においては，A－1ラインとA－2ライン間の主効果には有意差が見られなかったが，回答項目間の主効果には，保護者との関わりを除いて，いずれも5％水準以上の有意差が見られた。しかし，交互作用に関してはどの質問項目にも有意差はみられなかった。

共通質問項目に関しては，共通質問1においてのみA－1ラインとA－2ライン間の主効果に5％水準で有意差が見られた。共通質問1は，1989年告示幼稚園教育要領実施以降の子どもとそれ以前の子どもに差があるか否かに関する質問であった。各ラインの回答者について検討してみると，在職年数の10年未満者の占める割合が，A－1ラインが15.4％であるのに対して，A－2ラインが28.6％と大きいことが判明した。前記5％水準の有意差は，A－1ラインとA－2ラインにおける教師の在数年数の差に起因すると考えられる。よって，この有意差に関しては，A－1ラインとA－2ラインを分けて比較検討することから除外する。両ラインを1つにまとめて考察を進める。

表4　A－1ラインおよびA－2ラインにおける各質問項目に対するANOVA

		ラインの主効果	回答項目の主効果	交互作用
経験別質問項目	子どもの生活面	F＝1.127,df＝1,18 N.S.	F＝1.840,df＝11,198 ＊	F＝1.386,df＝11,198 N.S.
	子どもの学習面	F＝0.094,df＝1,18 N.S.	F＝11.570,df＝5,90 ＊＊	F＝1.006,df＝5,90 N.S.
	保護者との関わり	F＝0.400,df＝1,18 N.S.	F＝2.271,df＝2,36 N.S.	F＝0.549,df＝2,36 N.S.
	同僚へのアドバイス	F＝0.345,df＝1,18 N.S.	F＝2.780,df＝7,126 ＊	F＝1.934,df＝7,126 N.S.
共通質問項目	共通質問1	F＝5.140,df＝1,18 ＊	F＝1.094,df＝22,396 N.S.	F＝0.915,df＝22,396 N.S.
	共通質問3	F＝0.635,df＝1,18 N.S.	F＝6.764,df＝7,126 ＊＊	F＝0.477,df＝7,126 N.S.
	共通質問4	F＝0.055,df＝1,18 N.S.	F＝0.696,df＝16,288 N.S.	F＝0.620,df＝16,288 N.S.
	共通質問5	F＝0.128,df＝1,18 N.S.	F＝1.137,df＝11,198 N.S.	F＝1.004,df＝11,198 N.S.

注　＋ 10%水準で傾向があることを示す。　＊＊ 1%水準で有意差があることを示す。
　　＊ 5%水準で有意差があることを示す。　N.S. 有意差なし。　（以下同じ）

表4から，A－1ラインとA－2ライン間には分散分析の結果有意差が見られなかったことが明らかにされた。つまり，幼稚園年長児の後に小学1年生を担任経験することの順序からくる移行に関する認識の違いについては，教師の回答には差異が見られなかった。

さらに，表1からも示されるように，B，C，D群に所属する教師数も少ないことから，B，C，Dライン群を込みにして，Aラインとの比較を行う。

(2)　年長児および小学1年生を担任した教師（Aライン）とそれ以外の教師（B・C・Dライン）の比較

表5－aは，AラインとB，C，Dライン群における経験別質問項目に対する平均回答数を示す。

表５－ａ　各ラインにおける経験別質問に対する平均回答数

項目	ライン	A	B	C	D	合計
子どもの生活面	イ	0.650	0.000	0.333	0.333	0.516
	ロ	0.500	0.000	0.000	0.000	0.323
	ハ	0.600	0.500	0.667	0.667	0.613
	ニ	0.300	0.000	0.000	0.337	0.226
	ホ	0.150	0.000	0.000	0.000	0.097
	ヘ	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032
	ト	0.500	0.000	0.000	0.000	0.032
	チ	0.100	0.500	0.000	0.000	0.097
	リ	0.200	0.000	0.167	0.000	0.161
	ヌ	0.500	0.000	0.000	0.000	0.037
	ル	0.000	0.500	0.167	0.000	0.065
	ヲ	0.000	0.500	0.167	0.000	0.065
子どもの学習面	あ	0.200	0.000	0.167	0.000	0.161
	い	1.050	1.500	1.000	0.333	1.000
	う	0.450	0.000	0.000	0.000	0.290
	え	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	お	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	か	0.000	0.000	0.333	0.333	0.097
保護者との関わり	A	0.400	0.000	0.333	0.333	0.355
	B	0.650	1.000	0.833	0.667	0.710
	C	0.250	0.000	0.167	0.000	0.194
同僚へのアドバイス	a	0.500	0.000	1.000	0.333	0.548
	b	0.150	0.000	0.323	0.000	0.161
	c	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	d	0.150	0.500	0.323	0.333	0.234
	e	0.200	0.000	0.167	0.000	0.161
	f	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032
	g	0.100	0.000	0.333	0.333	0.161
	h	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032

表５－ｂは，ＡラインとＢ・Ｃ・Ｄラインの各ラインにおける共通質問項目に対する平均回答数を示す。

表５－ｂ　各ラインにおける共通質問に対する平均回答数

項目	ライン	A	B	C	D	合計
共通質問1	イ	0.150	0.000	0.167	0.000	0.129
	ロ	0.300	0.000	0.334	0.000	0.258
	ハ	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	ニ	0.100	0.000	0.000	0.000	0.065
	ホ	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	ヘ	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	ト	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	チ	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	リ	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032
	ヌ	0.050	0.000	0.167	0.000	0.065

共通質問1	ル	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	ヲ	0.050	0.000	0.334	0.000	0.097
	ワ	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	カ	0.050	0.000	0.167	0.333	0.097
	ヨ	0.350	0.000	0.167	0.000	0.258
	タ	0.150	0.500	0.883	0.000	0.290
	レ	0.100	0.000	0.334	0.000	0.129
	ソ	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	ツ	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	ネ	0.050	0.500	0.334	0.334	0.161
	ナ	0.000	0.500	0.500	0.000	0.129
	ラ	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032
	ム	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032
共通質問3	あ	0.400	0.500	0.668	0.333	0.452
	い	0.700	0.000	0.000	0.333	0.484
	う	0.150	0.000	0.334	0.000	0.161
	え	0.350	0.000	0.000	0.000	0.226
	お	0.010	0.000	0.000	0.000	0.010
	か	0.010	0.000	0.010	0.000	0.020
	き	0.010	0.000	0.050	0.020	0.080
	く	0.000	0.000	0.010	0.010	0.020
共通質問4	A	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	B	0.100	0.000	0.000	0.333	0.097
	C	0.100	0.000	0.000	0.000	0.065
	D	0.150	0.000	0.167	0.000	0.129
	E	0.100	0.000	0.000	0.000	0.065
	F	0.100	0.000	0.333	0.000	0.129
	G	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	H	0.100	0.000	0.000	0.000	0.065
	I	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	J	0.050	0.000	0.167	0.333	0.097
	K	0.100	0.000	0.167	0.000	0.097
	L	0.100	0.050	0.333	0.000	0.161
	M	0.200	0.050	0.000	0.000	0.161
	N	0.050	0.000	0.167	0.000	0.065
	O	0.050	0.000	0.167	0.333	0.097
	P	0.000	0.000	0.333	0.333	0.097
	Q	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032
共通質問5	a	0.200	0.000	0.500	0.000	0.226
	b	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	c	0.100	0.000	0.167	0.000	0.097
	d	0.150	0.000	0.000	0.000	0.097
	e	0.150	0.000	0.000	0.000	0.097
	f	0.200	0.000	0.000	0.333	0.161
	g	0.050	0.000	0.167	0.667	0.129
	h	0.050	0.500	0.000	0.000	0.065
	i	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032
	j	0.050	0.000	0.000	0.000	0.032
	k	0.020	0.000	0.500	0.000	0.226
	l	0.000	0.000	0.167	0.000	0.032

表6－aは，ＡラインとＢ，Ｃ，Ｄライン群間との分散分析の結果を示す。

表6－a　ＡラインとＢ・Ｃ・Ｄラインにおける経験別質問項目に対するANOVA

		ラインの主効果	回答項目の主効果	交互作用
経験別質問項目	子どもの生活面	F＝2.925,df＝1,29 ＋	F＝2.927,df＝11,319 ＊＊	F＝0.918,df＝11,319 N.S.
	子どもの学習面	F＝2.952,df＝1,29 ＋	F＝17.043,df＝5,145 ＊＊	F＝1.732,df＝5,145 N.S.
	保護者との関わり	F＝0.243,df＝1,29 N.S.	F＝7.725,df＝2,58 ＊＊	F＝0.750,df＝2,58 N.S.
	同僚へのアドバイス	F＝1.605,df＝1,29 N.S.	F＝4.052,df＝7,203 ＊＊	F＝0.392,df＝7,203 N.S.

表6－aから，経験別質問項目における子どもの生活面・子どもの学習面に関して，ラインの主効果に10％水準で傾向が見られたことおよび回答項目間の主効果に１％水準以上の有意差が見られたので，この二つの質問項目に対してさらに下位検定を行った。子どもの生活面に関しては，「項目ロ・移行」において，Ａラインの方がＢ・Ｃ・Ｄライン群より５％水準（ｔ＝2.36，df＝18）で有意に多く回答していることが明らかにされた。子どもの学習面においては，「項目う・学習」において，Ａラインの方がＢ・Ｃ・Ｄライン群よりも１％水準（ｔ＝2.93，df＝19）で有意に多く言及していることが明らかにされた。一方，「項目か・自主性・自発性」に関しては，Ｂ・Ｃ・Ｄライン群の方がＡラインよりも５％水準（ｔ＝1.94，df＝10）で多く言及していることが明らかにされた。

幼稚園年長児および小学校１年生も担任している教師の方が，そうでない教師よりも，幼稚園から小学校への移行や文字・数などの学習に関して強い関心を示していること，これに対して，幼稚園年長児および小学１年生の担任経験のない教師は子どもの学習面において自主性・自発性に強い関心を示していることが明らかにされた。

表6－b　ＡラインとＢ・Ｃ・Ｄラインにおける共通質問項目に対するANOVA

		ラインの主効果	回答項目の主効果	交互作用
共通質問項目	共通質問１	F＝0.867,df＝1,29 N.S.	F＝2.632,df＝22,638 ＊＊	F＝2.018,df＝22,638 ＊＊
	共通質問３	F＝0.002,df＝1,29 N.S.	F＝4.202,df＝7,203 ＊＊	F＝4.912,df＝7,203 ＊＊
	共通質問４	F＝0.800,df＝1,29 N.S.	F＝0.860,df＝16,464 N.S.	F＝1.118,df＝16,464 N.S.
	共通質問５	F＝0.071,df＝1,29 N.S.	F＝1.503,df＝11,319 ＋	F＝0.844,df＝11,319 N.S.

表６－ｂに示されるように，Ａライン間とＢ・Ｃ・Ｄライン間の主効果に有意差はみられなかった。しかし，回答項目の主効果に関しては，共通質問１と共通質問３においていずれも１％水準で有意差がみられたことから，さらに下位検定を行った。

共通質問１においては，「項目ナ・自己中心性」に関して，Ｂ・Ｃ・Ｄライン群の方がＡラインよりも５％水準（ｔ＝2.39，df＝10）で有意に多く言及していることが明らかにされた。

共通質問３においては，「項目い・幼小連携の必要性」に関して，Ａラインの方がＢ・Ｃ・Ｄラインよりも１％水準（ｔ＝3.53，df＝28）で多く言及していること，さらに，「項目え・発達段階に応じた指導の必要性」に関しても同様にＡラインの方がＢ・Ｃ・Ｄライン群よりも５％水準（ｔ＝2.67，df＝19）で多く言及していることが明らかにされた。

これらの結果から，幼稚園年長児と小学１年生の担任経験のある教師は，幼小連携の必要性や発達段階に応じた指導の必要性に強い関心を示している。一方，幼稚園と小学校における勤務経験はあるが年長児と小学１年生の担任経験のない教師は，子どもの自己中心性や子どもに寄り添う教育の必要性に強い関心を寄せていることが示された。

本研究においては，幼稚園と小学校における教職経験の差異による幼稚園から小学校への移行に関する認識を明らかにすることを意図し，幼稚園と小学校の双方の教職経験をもつ教員がＡ～Ｄの４つのラインに分類された。しかし，Ａ－１ラインとＡ－２ライン間に分散分析の結果有意差がみられなかったこと，さらに，各ラインにおけるサンプル数に偏りが見られたため，本研究においては，①幼稚園年長児担任後に小学１年生を担任することへの影響および②年長児および小学１年生を担任した教師（Ａライン）と，それ以外の幼稚園および小学校を経験した教師（Ｂ・Ｃ・Ｄライン）の比較検討をすることに留められた。今後各ラインのサンプル数を増やしていき，検討を重ねる必要がある。

上記(1)および(2)の結果を先の研究（進野・小林，1999）と比較すると，本研究における幼稚園年長児担任および小学１年生担任つまりＡラインの教師群は，先の研究における幼稚園年長児担任の認識と類似しており，これに対してＢ，Ｃ，Ｄラインの教師群は小学校教師の認識と類似していることが示唆された。

要　約

本研究は，幼稚園から小学校への移行の認識について明らかにするために幼稚園と小学校の両教育機関における教育経験を持つ教師31名を対象に質問紙法により自由記述による回答を求めた。その結果，以下のことが明らかにされた。

1．小学１年生担任に先立って幼稚園年長児担任を経験するか否かの経験差は移行の認識に関しては見られなかった。
2．幼稚園年長児と小学校１年生を担任した教師は，他の教師群と比較して，「移行」，「文字・数などの学習」，「幼小連携の必要性」および「発達段階に応じた指導の必要性」に関して，有意に多く言及していた。
3．幼稚園年長児と小学校１年生を担任した教師群（Ａライン）と比較して，それ以外の幼稚園および小学校を経験した教師群（Ｂ・Ｃ・Ｄライン）は「自己中心性」に関する言及が有意に多かった。

引用文献

飯島婦佐子　生活をつくる子供たち　倉橋惣三理論再考　フレーベル館，1990.
飯島婦佐子　幼稚園と小学校への移行　性格心理学ハンドブック　福村出版，788～789，1998.
柏木　恵子　幼児期における「自己」の発達　行動の自己抑制機能を中心に　東京大学出版会，1988.
千羽喜代子・酒井仁美　1995　自主性の発達からみた小学校１年生の学校生活への適応　大妻女子大学紀要－家政系－，31，219～227.
進野智子・小林小夜子　1999　幼稚園から小学校への移行に関する発達心理学的研究Ⅰ　長崎大学教育学部教育科学研究報告56，61～68.

資　料

先生ご自身のことについてお尋ねします。下線の部分について記入し，性についてはどちらかを○を囲んでください。

回答者のお名前＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿　男・女（年齢　　歳）

回答年月日　平成　　年　　月　　日

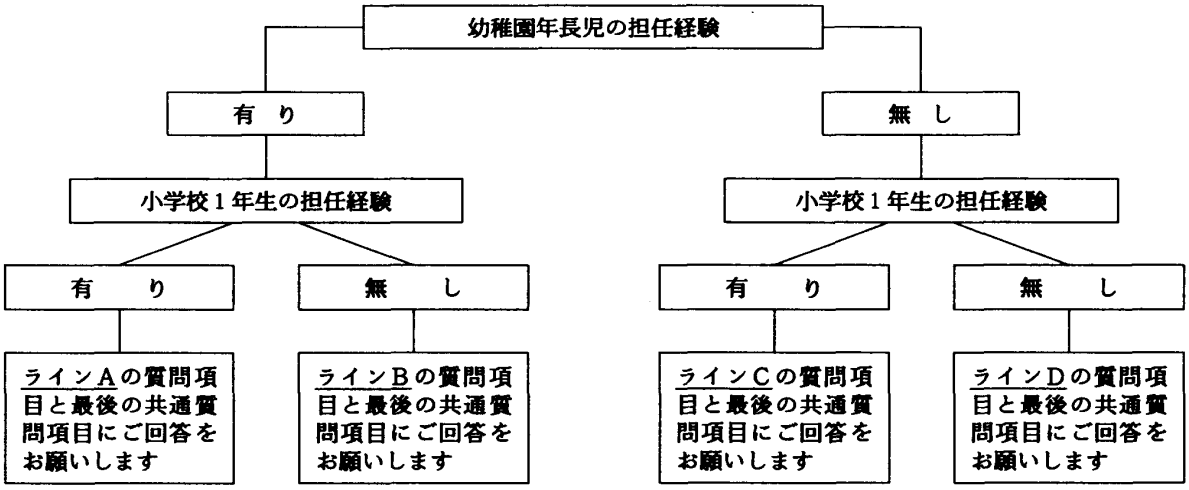
現在の勤務　・小学校の場合：＿＿＿＿＿＿小学校　　年生担任・その他（学校、教頭、教務主任等）

　　・幼稚園の場合：＿＿＿＿＿＿幼稚園　　歳児担任・その他（園長、副園長等）

先生ご自身のこれまでの教育歴について現行の「幼稚園教育要領」が施行された平成２年（1990年）以前と以降の視点からお尋ねいたします。また，幼稚園年長児や小学校１年生を担任された経験がありましたら，その期間も合わせて，下表の中にご記入をお願いします。

	平成2年以前の勤務期間	平成2年以降の勤務期間	年長児を担当した期間	小学校1年生を担当した期間
幼　稚　園				
小　学　校				

先生の教育歴から下図をたどり，それぞれの質問項目にご回答をお願いします。



ラインA

小学校１年生を受け持った時，先生にはすでに幼稚園の年長児を担任した経験がありましたか。

経験のある先生にお尋ねします。

小学校１年生の担任をする時，幼稚園の年長児を担任した経験がどのような面で活かせましたか。できるだけ具体的にお書きください。

子どもの生活面

子どもの学習面

保護者との関わり

同僚へのアドバイス

その他

経験のない先生にお尋ねします。

幼稚園の年長児の担任を小学校１年生の担任よりも以前に経験していれば，小学校１年生を担任する時どのような面で役に立ったと思いましたか。できるだけ具体的にお書きください。

子どもの生活面

子どもの学習面

保護者との関わり

同僚へのアドバイス
その他

ラインB

年長児の担任経験が，小学校1年生を除いた他の学年の児童を指導する際にどのような面で役に立ちましたか。（役に立つと思いますか。）できるだけ具体的にお書きください。
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

現在担任している子どもを見ていて，感じることを次のイ，ロ2つの観点から，ご記入ください。

イ，年長の時に教育しておくべきだったこと
（自分自身の保育を振り返って）
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

ロ．小学校1年生の担任の教育・指導に対してもっと配慮してほしかったこと
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

ラインC

年中児または年少児の担任経験だけでも，小学校1年生の児童を指導する際にどのような面で役に立ちましたか。（役に立つと思いますか。）できるだけ具体的にお書きください。
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

現在担任している子どもを見ていて，年長児の担任に教育しておいて欲しかったと感じることや要望などを，ご記入ください。
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

ラインD

年中児または年少児の担任経験だけでも，小学校1年生外の児童を指導する際にどのような面で役に立ちましたか。（役に立つと思いますか。）できるだけ具体的にお書きください。
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

現在担任している子どもを見ていて，感じることを次のイ，ロ２つの観点から，ご記入ください。

イ，年長の時に教育しておくべきだったこと
感じること，要望など
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

ロ．小学校１年生の担任の教育・指導に対して
もっと配慮してほしかったこと
子どもの生活面
子どもの学習面
保護者との関わり
同僚へのアドバイス
その他

共通質問

1．現行の幼稚園教育要領による保育で教育されたここ10年間の子どもと，それ以前の子どもと比較して先生のお考えをお聞かせください。
2．現行の幼稚園教育要領による保育で教育されたここ10年間の子どもの保護者を見ていて，それ以前の保護者と比較して先生のお考えをお聞かせください。
3．幼稚園および小学校の教師としての経験を持つ先生からご覧になって，どちらか一方の経験しかない教師に対してどのように思いますか。率直なご意見をお聞かせください。
4．現在の幼稚園教育に対する率直なご意見，特に，保育形態や，保育内容についてお聞かせください。
5．現在の小学校教育に対する率直なご意見をお聞かせください。